



Title	音声とスポータ
Author(s)	清島, 秀樹
Citation	印度民俗研究. 1993, 8, p. 3-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50304
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

音声とスポーツ

清島 秀樹

【インドの伝統的言語学者達が発見したもの】

人が「言葉」と呼ぶものの内には二つの存在を区別できる。例えば「うし（牛）」という言葉については、現実の物理的音声であるくうし>音と、非物理的な言語単位としての単語くうし>との二つを分けて考える事ができる。それは、空間における単なる空気の振動に他ならないくうし>音と、人間が持つ言語体系の構成要素としての単語くうし>との区別と言ってもよい。インドの伝統的言語学者達は、前者を「音声」、後者を「スポータ」と呼んだ。現代風に言えば、「音声」とは、我々の五感によって直接に捉え得るハード的存在であり、「スポータ」とは、五感では捉え得ないが心で把握されるソフト的存在である。この二要素によって言語現象が成り立っており、二つのもののどちらか一方、或は両者を、その時に応じて適宜に我々は「言葉」と呼んでいる。

この二存在についての研究は、言語学者の内でも、主に、「言語とは何か？」といった哲学的問題を好む人々によってなされてきた。その学説が発展する過程で、スポータの非物理的性質、超越的性質が強調されて行った結果、「言語の本質はスポータであり、音声はスポータを顕す単なる手段にすぎない」「スポータこそが真の恒常普遍の実在である」というようなスポータを絶対視する説が登場し、それは「スポータ論」と呼ばれることになる。この形而上学的色合いを帯びた言語論は、他学派の学者により非難や論難の対象としては好んで取り上げられたが、支持されることは殆どなく、インド思想界の中では概して「一部の言語学者達の奇妙な一学説」として扱われた。

さて、スポータ論を展開した者達も、その説を非難した者達も、スポータに関する一つの重要な問題を見逃していた。それは、これと同じ類のものが我々の回りに幾らでもある、という単純な事実である。インドの言語学者達が問題にした「音素」「単語」「文」などの言語単位ばかりではなく、およそ言葉や記号が造りだす世界のものは何れもスポータの仲間と言ってよい。それは、文法学や言語学の領域を遥かに越える概念である。そして、音声とスポータの関係に見られる「物理的存在と非物理的存在（超物理的存在）」という二重構造にしても、それと同じものを様々な現象の中に見出すことができる。実は、人が思考を繰り広げる場合は常にこのような構造があらわれる、とすら言い得る。これは、人間の思考活動の或る一つの基本骨格を示している。無論、インドの学者達がこの点に気付かなかったからといって、それは非難されるようなことではない。彼等は、文法学で用いる音素や単語などの言語単位の正体を説明するために「音声とスポータ」を持ち出したのであり、それ以外のものに関心を払わなかったのは至極当然だからである。しかし、彼等の見つけた二存在の区別は、その言語論の世界にだけ閉じこめておくには余りにもったいない程の普遍性と重要性を持っている。そこで、彼等が残した成果を基にして、この二つの存在について新たに考えを進めてみようというのが本論である。

【音声とスポータ】

我々が現実に関いたり発声したりするものは音声のくうし>である。それは、インドの伝統的自然学の説明でも、現代科学流の言葉で語っても、「空気の振動」という単なる物理的事象に過ぎない。この音声くうし>は、実際にそれが発せられて聞かれる度毎に、必ずどれも少しずつ違う。今これを読んでいる人は、試みにくうし>という言葉が発声してみて頂きたい。あなたが今そこで発した音と、これを書きながら私が発したくうし>音とは、空気の振動の仕方、振動場所、振動の発生時間などの点で、物理的には異なる存在である。異なっているからこそ、「あなたの声」「清島の声」という具合に簡単に区別ができる。身の回りの知人がくうし>という言葉が発した場合、その人の姿を見なくとも、声を聞いただけで誰がしゃべったかは即座に分かる筈。一人一人の声・発音が誰でも物理的に少しずつ違っているから、「それは太郎の声」「あれは花子の声」という具合に、それを発した人を容易に特定できるのである。無論、同一人物の発するくうし>という言葉も、その時々によって違う。子供の時と大人の時、病気の時と元気な時、気分が沈んでいる時と陽気な時、不快な時と愉快的な時、等々の場面によって全て違った音になる。その違いから、その人の体調や気持ちや或る程度まで推測できるのだ。微視的なところから見れば、現実に関我々が耳にするくうし>音は全てが異なると言ってもよい。くうし>音を構成する空気の振動形態が、その時々によって、一つとして同じではないからだ。たとえ機械に録音したくうし>音にしろ、それを再生する時の環境は必ず違っているから、我々の耳に入ってくる空気の振動状態は、たとえ幾らわずかであるにしても、全て違うことになる。同一の録音テープを同じ部屋の同じ機械で同じ様に再生したとしても、それを聞く時間が違う限り、その時の大気の温度湿度、周囲の雑音などは必ず異なるから、聴覚器官に達する空気振動は再生する度に異なってくる。つまり、病的な細かさで言えば、現実に関作られる諸々のくうし>音は、どれも皆異なる物理的存在なのである。どれ一つとして完全に同一のものはない。

すると、次のような反論が出るだろう。「現実のくうし>音はすべて異なっているから、それらに共通する確固とした物理的部分が有る」「くうし>音を示す空気振動の形態に共通する何らかの固有パターンを数量的に決定し得る」等々。これは、如何にももっともらしく聞こえるが、単なる希望的空想に過ぎない。実際にやってみれば分かるだろうが、「人々が発する各くうし>音に共通するもの」「諸々のくうし>音を成り立たせている基本部分」などというものを幾ら物理的、数量的に定めようとしたところで、まず巧くは行かない。近似的な規定は幾らでもできるだろうが、それは常に暫定的な近似でしかなく、曖昧な要素を必ず持っている。仮に千の発音実例を使って何らかの共通部分、共通形態を抽出できたとしても、新たな千一番目の発音例がそれに合致しないことが幾らでも起こり得るからだ。強い訛りが入った発音を想像すればよい。くう>音は殆どくお>に等しく、くし>音は極めてくす>に近い発音で、「牛」のことをくおす>に似た音で話す癖のある人が、「ワタスノオスガ、スンダ（私の牛が死んだ）」のような音で語った時。その使い方が適切でありさえすれば、つまり適確な文脈で用いられており、話者と聞

く者との間で「牛」の意味がはっきりと了解されれば、我々は、その人の〈おす〉に似た音を何の問題もなく〈うし〉音の一つとして扱うだろう。別に方言を持ち出さなくても、酔っ払いの言葉、寝惚けている人の言葉などを思い浮かべていただいてもよい。千の発音例から抽出した「〈うし〉音の数理的条件」から外れていながらも、実際に聞いている者が〈うし〉音とみなしてしまうような例は幾らでもある。又、言葉の発音は時代によっても違う。古代の〈うし〉音が現在のそれとどれほど違っていたかとか、将来どのような〈うし〉発音が生まれるかなどは誰も正確には言い得ない。当然、かの「〈うし〉音の数理的条件」から外れたものが出てくる可能性は幾らでもある。つまり、音の波長や波形などを数量的に定義することによって「〈うし〉音の本体」の物理的形態を定めようとしても、それは常に曖昧で不安定なものとならざるを得ないのだ。それ程、現実の〈うし〉音はどれも異なる物理的存在、異なり得る物理的存在、異ならざるをえない物理的存在なのである。

我々が耳にする〈うし〉音は何れも異なるものであるのに、それらの音は同一の単語〈うし〉を示すものとされる。例えば、太郎が一年前に東京で発した「うし(牛)」という言葉と、次郎が昨日大阪で発した「うし」とは、音声としては、どちらも発生して直に消滅してしまった物理現象であり、それらが存在した時間、空間は全く違い、両者の声調の違いにより空気の振動形態も異なっていた筈。しかし、このような諸々の相違にもかかわらず、我々はその二つを「同じ単語〈うし〉」とみなして、「彼等は東京と大阪でそれぞれ同じ言葉を使った」というふう考える。現実の一つとして同じものがない諸々の〈うし〉音が、一つの単語〈うし〉を表すもの、同じ一つの言葉として扱われるのである。この「同一のもの」をインドの伝統的言語学者達はスポータと呼んだ。そもそも、このスポータのような存在を認めない限り、我々が行う会話、思索、情報交換などの言語活動そのものが成り立たない。当然、今やっているような議論自体も有り得ないことになる。仮に人間の聴覚が異常に鋭くて、「太郎の作り出した空気振動と、次郎のそれとは全く違う。これほど違うものを〈同じもの〉とみなすことはできない」と皆が感じていたならば、「同じ単語」という発想がどうして起こり得るであろうか。その場合は、言語現象そのものすら存在し得ないだろう。しかし、現実には、我々は太郎と次郎の発した音声を「同じ言葉〈うし〉」と認めている。これは否定できない事実である。この「同じもの」がスポータに他ならない。

音声は様々な物理的変化を被るが、スポータは時空間における物理的影響を受けない。音声〈うし〉は、発生しては消えていくものであり、必ず、それが現れる時間と場所を特定できる。何時、何処に存在していたか、誰が(何が)それを発生させたかが明確に決まっているのだ。「次郎が五分前に自分の部屋で発声した大きな〈うし〉音」という具合に。これに対して、スポータ〈うし〉は、その存在場所や存在時間を特定できないし、発生・消滅することもない。〈うし〉という単語は何処に存在するのか、何時存在するのか、等々の質問には、犬猫の居場所を言うような調子では、答えようがないだろう。「そ

の単語は一時間前にはA地点に有ったが、現在はB地点に移動した。移動の道筋はコレコレである」などとは誰も言わない。特定の時空間座標の中に有るものならば、例えば石や猫や音のようなものならば、それを何処かに閉じこめたり隠したり放ったりできる。しかし、単語<うし>を部屋に閉じ込めたり、金庫に隠したり、箱から出すことなどは不可能である。確かに単語の使用は禁ずることができるが、禁じたからと言って、その単語が何処かの場所に閉じ込められたり、隠された訳ではない。「閉じ込められた」という表現が実際にあったとしても、それは比喩であり、物理的「閉じこめ」とは違う。又、それが現れたり消えたりすることも考えようがない。現実の太郎や次郎が死んでも<うし>という単語は無くならないし、新たに生まれた人間達がそれを使ったからといって、それが増える訳でもない。人が、どんな場所で、どんな時に、どのような条件で使おうが、単語<うし>は同じ一つの言葉である。<うし>を幾ら早口で発音しても、幾ら大声で発しても、それによって単語<うし>そのものが変形して早くなったり大きくなったりする訳ではない。音声は変形するが、スポーツは変化しないものである。紫式部が口にした「牛」という言葉と、清島が発した「牛」とは、音声としては異なる存在だが、言語単位の単語（スポーツ）としては完全に同じなのだ。音声は時空間の限定に縛られるが、スポーツは時空間の限定を離れているわけである。時空間の限定を受けるものを物理的存在と呼ぶならば、スポーツは非物理的存在、超物理的存在と言える。

【言語単位とスポーツの種類】

現実の<うし>音は一つ一つが全て異なっていると言ったが、実は少し考えて見ると、<うし>音そのものが「一塊の存在」「一つの音声」として物理的に実在するかどうから怪しくなる。「一つのもの」を創り出すのは人の意識である。これまでの議論で私が<うし>音と呼んできたものは、実際には、現われては消えていく複数の音の連続に過ぎない。<う>音が発せられた時は未だ<し>音は存在せず、実際に<し>音が発せられた時には<う>音は既に消滅してしまっている。この二つの音が時空間の内で同時に存在することは決してない。同時に存在しない二つのものを結び付けて「一つの<うし>音」とするのは、我々の精神の働きである。特定の空気振動のパターンの一部分を捉えて、或は諸部分をひとまとめにして、それを「一塊のもの」と見るのは、我々の意識が行う解釈作業の結果に他ならない。つまり、人の精神の働きが無くては、<うし>音は「一つの音声」にすら成り得ないのである。

正確に言えば、生じては消える音の数は二つとも限らない。<う>音を単音と見るか複合音・合成音として見るかは、それを含む言語体系によって違ってくるからだ。それは<し>音についても同じである。私が実際に「うし」という言葉を発した場合、その音は現代の日本語体系の内では確かに二つの音素より成ると言えるが、それは日本語世界でのみ通用することである。日本語とは異なる音素組織を持つ言語体系の内では、そ

の言葉が二つの単音の集まりと解釈されるとは限らない。仮に、ここに四人の人A、B、C、Dがいて彼等の母国語はそれぞれ全く異なり、誰もが日本語を知らなかったとしよう。同じ私の発音<うし>を、Aは二音(ush-i)とみなし、Bは三音(u-sh-i)、Cは四音(u-s-h-i)、Dは五音(a-u-s-h-i)の集まりとみなすような場合が十分に有り得る。その場合、いずれも間違っている訳ではなく、どれもが正しい。この四人の母国語の音素組織がそれぞれ違っており、私の作り出した空気振動の変容、<うし>音を解釈する基盤が異なるからだ。無論、Aが考える<i>音が他の連中の<i>音と同じとも限らないし、むしろ、各人の心にある<i>音は、それぞれ違っている可能性の方が高いであろう。このように、人が実際に言葉を発した時に作られる音声は、物理的に言えば空気振動の変化にすぎないが、それは特定の数の音素から出来ていると解釈される。そして、その数は言語体系により異なってくる場合がある。

複数の諸部分からなる<うし>音が、一度「<うし>という言葉を表す単語の音声」とみなされると、それは一塊のものとして考えられるようになる。「清島の<うし>発音」「太郎の<うし>発音」というように、あたかも、それぞれの<うし>音が一つのまとまった物理的存在であるかのように扱われる。前章での議論のやり方が正にそうであった。そのような扱いをしない限り、<うし>音に関する議論そのものが出来なくなってしまいうので仕方がない。さて、その扱いを可能にしている基盤が、言語単位としての単語<うし>、つまりスポータの存在であるが、これまではスポータというと単語のみを取り上げてきた。しかし、言語の構成単位ならば何でもそれはスポータと呼び得るのである。小さいところでは音素。実際に発せられる物理的<う>音に対して、非物理的な音素<う>はスポータと呼ばれる。或は、文。現実には口に出された「<うし>があるいている」という音」に対して、「<うし>があるいている」という文」もスポータである。前に述べた「音声<うし>と単語<うし>との関係」が、これらのものにも同じ様に当てはまることは容易に分かるだろう。<うし>があるいている>の物理的発音は人によって全て異なる存在なのに、それらは同一の文である、という具合に。更に、音素、単語、文以外の言語単位もスポータと呼び得る。<うし>という文節や句も、それが現実の音に対する言語単位である限りは、いずれもスポータと呼んでよい。但し、言語の構成単位として用いられる主要なものは音素と単語と文であるので、インドの言語学者達はスポータの種類としてこの三種のものを挙げるが多かった。音素スポータ、単語スポータ、文スポータの三者であるが、これはあくまで代表的なものにすぎず、もっと異なる言語単位もスポータと呼び得るのである。

【媒介手段としての音声】

「スポータは音声によって顕現される」というのが伝統的説明だが、これは巧い表現である。例えば、私が適当な発声努力をすれば<う>の音は生じるが、その時に、音が

生じるのと同じ様な調子で音素<う>が生じる訳ではないし、更に、その音が消えて無くなっても、その音素が消えて無くなることはない。私の発声動作の有無に一切関係なく、音素<う>は五十音表の内に何の変化もなく存在し続けている。それでは、私の発音は、一体、何の役に立つのか？ これに対して、インドのスポーツ論者達は「現実が発せられた音<う>が恒常的存在である音素スポーツ<う>をあらわにする」と答えた。音素は発生や消滅などの物理的变化を全く受けずに存在しているものだが、それを人が用いる時には、例えば今やっている議論のように音素について語る時には、それを指し示す何らかの物理的手段を使わなくてはならない。この場合は<う>音がそれだ。その手段の使用によって特定の音素が明らかになり、それを用いた思考が展開できるようになる。この特定化とは、諸音素の内の或るものにスポットライトを当てて、それを浮き上がらせるような作業である。スポットライトにより特定のものが照らし出されない限り、その特定の音素を使った言語活動は起こり得ない。つまり、<う>音はスポットライトのような手段であり、それによって照らし出されて音素<う>が浮かび出ることが「顕現」である。

顕現をもたらす手段と、顕現する対象とは異なる世界に属する。音が存在するのは、時空間座標でものの位置を決め得る物理的世界だが、音素はそこには存在しない。もし存在するならば、音素<う>が有る場所と、その存在時間をこの世界の内て特定出来る筈だが、そんなことは到底できない。音などの物理的存在物は五感で捉え得るが、音素を掴んだり舐めたりすることはできない。音素は、音が属する物理的世界の内には存在しないのである。では、現実にも何処にも存在しない架空の精神産物かと言うと、そうではない。現に、我々は音素<う>について語っており、この存在を認めない限り、日本語について語ることも出来なくなる。五十音表の諸音素の存在を認めなければ、日本語そのものが有り得ないことは容易に分かるだろう。我々が日本語の築き上げている世界を信ずる限り、つまり、日本語による精神活動とその産物の存在を信じている限り、音素の存在を認めざるを得ないのである。無論、その存在は石や犬などの物理的存在とは性質の違うものであるが、ともかく、何らかの存在である。そこで、それが存在するような非物理的世界を仮にスポーツ世界と呼ぶ。そして、そこに存在する音素などの言語単位と、その同類の非物理的存在をスポーツ的存在と呼ぶことにする。

特定のスポーツ的存在を他人に示すには、物理的存在である音を使わなければならない。現実に使われた音によって、初めて、特定のスポーツ的存在が指示される。音声のような物理的手段を実際に使わない限り、人はスポーツ的存在を特定することができないし、それを用いることもできない。単に五十音表がスポーツ世界に有るというだけでは何もならないことは容易に分かるだろう。五十音表の内の特定の音素が決まったやり方で用いられることによって、初めて我々の言語活動が可能になる。但し、スポーツ的存在を用いると言っても、それは、石や犬のような物理的存在を用いるのとは違う。音や棒などの物理的存在を扱う時は、必ず、その存在に何らかの変化をもたらすものだが、

スポーツ的存在は人に扱われても一切の物理的変化を被らない。音素<う>をどのように用いたからと言って、それが五十音表の中で何か変化する訳ではないだろう。音素を用いるとは、特定のスポットライトの当て方をすることである。それは、音素を特定のパターンで顕現させることに他ならない。これがスポーツ的存在を操作する作業であるが、それはスポーツ世界に遊ぶこととも言える。そこにいたる必要不可欠の手段が、音声などの物理的存在の使用である。だが、ただ独りだけで他人を全く相手にせず黙然と考えているだけなら、声を出さないで、そのような物理的存在の必要がない場合もある。しかし、そのような人にしても、独りで思考を出来るようになる迄は、言語を学び先人の文芸財産に接した筈であり、その折は音などの物理的手段を用いたに違いない。それが無かったなら、言葉により思考する能力そのものが起こり得なかった筈だ。このような独り思考の場合は別として、通常は、他人の考えを聞いたり、新たな知識を仕入れたり、古典を味わったり、自分の考えを伝えようとする限り、音声などの物理的存在を使わざるを得ないのである。

スポーツ世界に至り、その世界の存在を扱うには何からの媒介手段が必要だが、それは何も音声に限らない。ただ、インドの文芸世界においては、書かれた文字ではなく、語り聞く音声情報が情報伝達の手段であったから、主に「音声とスポーツ」という対で議論がなされていたのである。インドの伝統的議論を離れるなら、スポーツを顕すものは他に幾らでもあることが分かる。例えば、文字と呼ばれるインクのしみ。諸君が今見ている紙の上のこの文字<う>は単なるインクのしみであり、私がノートに書いた<う>の字は鉛筆の炭素の汚れである。A君が黒板にチョークで書いた<う>の字、B君が習字紙に筆で書いた<う>の字、C君がワープロで打ち出した<う>の字、これらは全て似たような模様をしているだろうが、模様を造っている材質はどれも異なっており、A君のはチョークの粉、B君のは墨、C君のはワープロ・インクだ。無論、彼等の<う>の字も、この紙の上の<う>も、私が書いた<う>も、全て違った模様である。違っているから、その文字を見ただけで誰が書いたものかがすぐ分かる。この紙の上に沢山印刷されている<う>の字ですら、強力な虫眼鏡で見れば分かることだが、どれも細かい部分で幾らかの違いがあり、一つとして同じものはない。我々が現実に見る<う>の字は、物理的には全て異なる存在なのである。無論、それらに共通する<う>字の基本形態などを数理的に定めようとしても殆ど不可能であろう。仮に何らかの数理的条件が抽出できたとしても、それから外れるような<う>字が無数に有り得る。広告や商品に描かれた変形された<う>字を想像すればよい。このように、現実の<う>字は材質形態の点で何れも異なる物理的存在なのに、我々はそれらを「同じ一つの<う>」と認め、どれもが音素<う>を指し示すとみなす。さて、以上の議論は、前章で音声<うし>と単語<うし>について述べたものと全く同じだ。つまり、目に見える字と耳で聞く音とは、スポーツを顕す手段としては同じなのである。

現代では音を作る道具は無数にある。人の発声の他に、テープやCDによる再生、電

子機器による合成など。又、文字を作る道具も幾らでもある。多彩な筆記用具、様々なテレビやコンピュータのディスプレイ画面、ホログラム、映写機、無数の印刷様式など。これら何れものにより作られたくう>音やくう>字も、等しく、同一の音素くう>を顕す物理的手段である。その他に、点字の凸凹模様、手話の手の動き、手旗信号の旗の位置なども、スポーツ的存在くう>を指し示す手段となり得る。科学技術が発達するに連れて、スポーツ世界に至る手段の種類は増えて行くだろう。手段は沢山有ったほうが便利であるから、人がそれを欲するのである。

スポーツ的存在と、それを顕す物理的手段とは互いに切り離すことができない。どちらか一方だけでは何の意味もないからだ。音素くう>の存在が無ければ、現実の音や文字は単なる空気振動やインクの汚れでしかない。仮に、この世界に日本語が存在しなく、五十音表も存在しなかったとしたら、犬の唸り声「ウ、ウ」は単なる物理的音に過ぎなくう>音の連続ではないし、又、「ウ」形をした虫食い跡も無意味な模様でしかなくくう>字ではないだろう。特定の音や模様をくう>音、くう>字とみなすには、その前提として、音素くう>の存在を認めていることが不可欠だからである。一方、音などの物理的媒介手段が何もない場合は、スポーツ的存在も「有る」とは言えなくなる。仮に、何かの事故で地球が人間と共に消滅してしまい、この宇宙から人類とその遺産・痕跡の全てが消えてしまったとしよう。くう>音を発する人も機械もなく、くう>字を書く人も物もない。このような場合、音素くう>が存在すると言い得るか？ 恐らく、否、であろう。音素を顕現させる手段が何も存在しない状態では、音素そのものも存在するとは言い難くなるのだ。つまり、スポーツ的存在と、それを顕す手段の物理的存在とは、両者が揃っていて初めて「まともな存在」として機能する。

【他のスポーツ的存在とその媒介手段】

「スポーツと音声」の関係と同じものは、言語単位の間にも見られる。まず、言葉を使って創られた作品とその媒体。例えば、小説『坊っちゃん』とその本との関係がそれである。本は、物理的には、インクの染みが付いた紙の集まりにすぎないが、小説の世界に至る手段だ。現実には我々が手にする『坊っちゃん』の本は、紙質・インクの種類・本の形態・活字の字体などの点で、どれもが違っている。同じ版のコピーと言えども、微視的なところから見ると、どれも異なる物理的存在である。これは、前に述べたくうし>音と同じ。そして、何時、どのようなところで、どの本を使って読もうが、それは同じ小説『坊っちゃん』を読んでいることになる。本の形態、本が読まれる時と場所、読む人などの諸々の相違とは関係なく、小説は「同じ一つもの」なのである。又、本がこうむる物理的变化から小説は離れている。本が汚れても、擦り切れても、燃えてしまっても、それらは『坊っちゃん』の世界に何の影響も及ぼさない。本を盗んだり、破壊することはできるが、小説の世界に対しては何もできない。出版する本の部数を幾ら増やしても、

或は、倉庫に有る本を幾ら燃やしても、それによって小説『坊っちゃん』そのものが増えたり減ったりする訳ではない。つまり、小説はスポーツ的存在で、本は媒介手段なのである。一つのスポーツ的存在を顕しだす物理的手段は幾らでも有り得るので、本以外の物、例えばCD、磁気テープ、マイクロ・フィッシュ、コンピュータ・ネットワーク上のデータ・ベースなどでも『坊っちゃん』を味わえることは容易に分かるだろう。さて、以上述べてきたことは、なにも小説だけでなく、言語によって創られる作品全てについて当てはまる。この論文も然り。つまり、言葉を使って構築された世界は、多かれ少なかれ、どれもスポーツ的存在なのである。

知的ゲームもそうである。「ゲーム世界とゲームで使う道具」の関係が、スポーツと音声のそれに等しい。将棋は駒や盤にどのような物を使ってもできる。駒や盤は将棋の勝負を展開する手段であり、その材質は、木、紙、プラスチック、象牙、金属など何でもよい。最近なら、コンピュータ上でも可能だが、この場合は材質が何なのかもはっきりしない。或る特定の勝負を再現する時に、駒や盤にどのような物を使おうが、それらはどれも同じ勝負である。名人戦が行われている時、対決している両人が実際に触っている駒と盤、それを放送しているテレビ画面の上の駒と盤、次の日の新聞紙上に乗った局面図、これらはどれも違うものだが、「同じ一つの名人戦」をあらわしている。つまり、我々が楽しんでいる将棋の勝負そのものは、物理的存在ではないのだ。只、それを楽しむためには駒や盤などの媒介手段が必要となる。独りで楽しむ詰め将棋にしる、本や雑誌の紙上のインク模様という物理的存在を見なければ、何も始まらない。名人どうしになれば、現実の駒や盤を使わずに、口頭で駒の位置を述べあうことによって将棋ができるだろうが、この場合も媒介手段としては駒の動きを述べる音声がある。この「将棋と道具」の関係は、他のゲームでも同じだ。トランプ、チェス、オセロ、麻雀、双六、囲碁、五目並べ、花札など。例えば、トランプの手にしても、どのような材質・形態のカードを使おうが、「ストレート・フラッシュ」は「ストレート・フラッシュ」であり、変わりはない。じゃんけんをやる場合も、「ぐー、ちょき、ぱー」でやろうが、「藤八拳」や「虫拳」形式でやろうが、「三すくみの勝負」という点では同じである。五目並べは、紙とペンと消しゴムでもできるし、立派な碁盤と碁石でもできる。つまり、これらのゲームの正体は、スポーツ的存在に他ならないのである。

ゲームの道具と、それによって展開されるゲーム世界との関係は、基本的には、音とスポーツの関係と同じだが、少し違うところもある。それは、ゲームを味わう人の中には、その道具を味わう人が少なくないからである。そのような人にとって、将棋とは、攻め合い守り合いという勝負そのものの他に、駒や盤の美的価値を味わう楽しみの要素が加わったものである。チェスの駒に凝ってみたり、碁石の感触を楽しんだりする人は少なくない。彼等にとっては、道具が違えばゲームそのものも違ってきてしまう。紙の盤と駒でやる将棋と、桧の盤と駒でやるものとは、たとえ同じ局面展開を表していても、「違う将棋」になる。これと似たことは小説の場合にもある。小説世界への手段である本

に強い愛着をしめず人達がいる。彼等は、「『坊っちゃん』は初版本で見なくちゃ、その本当の味わいは分からない。新字体で新仮名遣いの文庫本などで駄目だ」などと言う。彼等にとっては、初版本による小説『坊っちゃん』の世界と、文庫本によるそれとは違うものである。彼等の場合、小説というスポーツ的存在の色合いが、そこへ至る物理的手段によって変わって来るとも言えよう。それと同じような例は、演劇に見られる。例えばカーリダーサの「シャクンタラー」は、近代に至り活字に写されて固定したものはスポーツ的「一つの作品」として、音素と同じ類のものと考え得るが、それは無理に箱に閉じ込められたような一種の奇形「シャクンタラー」でもある。この作が元々は演劇の台本であるなら、それを演ずる俳優達の違いによって、その上演ごとにかなり違った劇となる筈。A劇団がやるものとB劇団がやるものとは、たとえ同じ「シャクンタラー」の名で呼ばれるものであっても、殆ど別の劇と思えるほどに異なってくることが有り得る。もっとも、そのような時でも、我々は両劇団が演じたものを「同じ劇の全く違う上演」とでも言うのだろうが、一体何が「同じ」なのかは些かはっきりしない。いずれにしろ、昔から実際に演じられてきた「シャクンタラー」は、上演の様子も、それが繰り広げる世界も、それぞれ違っていったことだろう。このように、演劇などの場合には、スポーツ的存在とそれを顕す物理的手段という図式がぴったりと当てはまりにくいこともある。

ちなみに、これまで述べてきたゲームには、体を使い動かすことを主としたスポーツの類は含まれていない。将棋やトランプなどは頭を働かせることが中心となっている。スポーツの場合は頭と体の両方を働かせるが、必ず物理的に体を動かすことが主要素として入ってくる。一方、将棋などでは、身体を動かすことは必ずしも必要ではないし、主目的でもない。このような知的ゲームが創りだす世界は、単に、ルールとその組み合わせだけから構成されている。将棋の世界は、駒の動き方、勝ち負けの決まり方、局面の進め方等々に関する有限個の規則と、その規則の組み合わせによってあらわれる局面とで出来上がっている。この規則も、その組み合わせ結果である局面も、当然、スポーツ的存在に他ならない。我々がゲームを楽しむのは、スポーツ的存在の操作を楽しんでいるのである。

既に御分かりと思うが、「幾何学の世界」「数の世界」なども同類である。幾何学的に純粋な「直線」「正三角形」や「円」が現実の物理的世界に存在しないことは誰でも知っているだろう。それらが、前に述べた音素<う>と同じ仲間であることは、もはや説明の必要もない筈。つまり、プラトンがイデアと呼んだものと、バルトリハリがスポーツと呼んだものとは、基本的に同じ類の存在とみなし得るのである。但し、直線のイデアと現実の直線との関係が「真実の存在とその影」というイメージで語られるのに対して、スポーツ<う>と音声<う>との関係は「顕現されるものと顕現の手段」といった言葉で説明される点に違いがある。しかし、この点については、これ以上入って行くと本論の話しから逸れるので、ここで止めておく。なお又、「1、2、3などの数」もスポーツ的

存在だが、それも、音素<う>に関する話しを思い出して頂ければ容易に分かるだろう。

【共有世界】

スポーツ世界が妄想や白昼夢と違うのは、それが人々にとっての共有性と普遍性を持っている点である。個人的な妄想や錯覚の世界は、その人だけの固有世界であり、その中に他の人間が入って行くことはできないし、その世界の事物を他の人間が自由に用いることもできない。A君の妄想世界は彼にとってのみ存在する。彼がその世界の様子を詳しく友人のB君に話した結果、B君の白昼夢の中に「A君の妄想世界らしいもの」が現れたとしても、それはA君のものと同じとは言えないだろう。正確に言えば、同じか違うかすらも確かめようが無い。当然、A君の妄想世界の中に存在する「竜」や「剣」や「城」なども、B君には使いようがないので、存在しないに等しい。B君が自由に扱えるのは、彼自身の白昼夢に現れる「竜」「剣」「城」だけである。無論、両君の世界に現れる「竜」「剣」「城」の言葉で呼ばれるものも、それぞれ異なっていよう。これに対して、五十音表にある音素は、日本語を知っている者なら誰でも好きなように使えるし、その姿もはっきりしていて、そこに曖昧さは全くない。どの日本人にとっても音素<う>は同じ一つのものである、ということに我々は些かの疑いも持っていない。それを信じているからこそ、このような議論自体が可能になる。今ここに私が挙げている<う>と、これを読む人の<う>とが同一のものであることを確信していなければ、私はこのような思索すらできないだろう。「誰にとっても同じもの」ということは、それを皆が共有していること、その共有を心の底で確信していることを意味する。このような共有性、普遍性がスポーツ的存在の特徴である。

当然、音素の組み合わせからなる文学作品なども共有の世界だ。小説『坊っちゃん』については、その本を読みさえすれば、だれでも互いに語り合うことができる。そして、その時に語っている対象が「同じ小説である」ということを皆が承知している。この無意識の深い了解が無い限り、誰も『坊っちゃん』については語り合えないだろうし、語り合おうとすらないだろう。言語の創り上げるスポーツ的存在は物理的時空間の限定を受けないものなので、それは時代を越えて場所を越えて共有される。大正時代の一評論家が扱った『坊っちゃん』も、現代の批評家達が論ずる『坊っちゃん』も、未来の学者が研究するだろう『坊っちゃん』も、時空を越えて彼等に共有されている同一のものである。この共有性を人々が信じているからこそ、各時代の人々は同じ古典を繰り返し繰り返し読み、それを論じるのである。その共有世界に入っていくためには、その世界を築いている言語組織を学び、その作品を顕す物理的媒介手段（本など）を適確に用いるだけで良い。こうすれば、誰でもそこに入って行き、そこで遊ぶことができる。同様に、ゲームの世界に参加して、それを味わうためには、その規則体系を学び理解して、そのゲームの道具を正しく使いさえすれば良い。規則に習熟している者達にとっては、その

ゲーム世界は同じ一つの揺るぎようのないものだ。複数の人にとって同一のものであるから、そのゲーム世界の様々の局面について明確な話しができる。将棋やトランプのようにルールがはっきりしているゲームの勝ち負けについて、曖昧に意見が別れることなど決してない。勝ち勝ち、負け負け、と誰でも分かる。これは、その世界を皆が完全に共有しており、誰にとっても「同一」という普遍性があるからである。

次のように言う者があるかもしれない。「ゲームの局面や勝負は誰にとっても明確に同じだが、『坊っちゃん』が与えてくれるイメージは人それぞれで違う。小説というスポーツ的存在が人の精神の中に創りだす印象は皆異なる。これはゲームや数学の場合と違うではないか」と。しかし、これは別に何の問題でもない。各人が自らの心の中に作り出したイメージは、人により異なっていて当然だからである。小説『坊っちゃん』というスポーツ的存在は全ての人にとって共有の同じ一つのものだが、それによってどのような意味が心の中に喚起されるか、その小説にどんな意味内容を投影するか、浮かび上がってきた意味から何を想像するか、等々のことは各人の精神構造によって違って来るからである。各人が使う単語<うし>は同一のスポーツであるが、その単語が使用された時、各人が抱く意味内容は異なってくる。インドの言語学者達はスポーツと音声と意味の関係について次のように語っている。「音声によりスポーツが顕現され、そのスポーツが意味を開示する」と。この「音声 → スポーツ → 意味」の流れの中で、スポーツがきっかけとなって意味が発現する過程において、人による解釈の違いが生じるのである。しかし、そのようなことは、ゲームや数学や音素<う>の場合は起こらない。これは、ゲームや数学においては、「スポーツ → 意味」の部分が人為的操作によって一義的に定められているのに対して、普通の言葉の場合はそのような操作による制限が無いからである。厳密な定義によってスポーツが開示する意味を人工的に限定している場合は、確かに、発現する意味は誰にとっても同じものとなる。一方、そのような人為的制約がない日常語からなる小説の場合は、そのようなことは起こらない。しかし、各人が抱く意味内容がいかに違っていても、その意味が現れるきっかけとなったスポーツ的存在は皆に共有の一つのものなのである。

さて、スポーツ世界という共有地に遊ぶことによって、初めて人は他者の存在を確信できる。自分が今相手にしているものと同じ世界の中に、自分と同じ様に動いている別の精神存在がいる、ということに気付くことによって、人は自分が独りぼっちではないことを知り、安堵の感を持つ。その感じは、現に共有しているスポーツ的存在からなる世界に居ることを互いに確認し合うことによって更に強まる。「彼も僕もこの小説を読んだ」「相手もこの将棋を楽しんでいる」「我々四人は今同じポーカーをやっている」などという具合に、同じものを扱っている仲間存在を相互に確認し合うことから、強い満足感と楽しさが生まれる。それを求めて、我々は同好の人、同学の人、同趣味の人、話しの通じる人を探す。異国に住んでいる場合、自らが慣れ親しんだ母国語を話す同国の旅行者などに会った時「ほっとする」ことがあるが、これは「自分と同じスポーツ世

界を持った者がいた」ことを確認するところから来る安堵感である。尊敬する人・好きな人が持っている知識や趣味と同じものを自分も持ちたい、そのような人と話しが通じるようになりたい、と思う感情も、共有スポーツ世界への憧れに他ならない。皆の話題に加わりたい、友達が話題にしているゲームをやって見たい、これを読まないで時代に遅れる、などという気持ちもそうだ。共有のスポーツ世界で動く喜びと楽しさ、これが我々の精神活動を促す基となっている。

ところで、インドの伝統的学者は、知識手段（プラマーナ）の一つとして「古典の言葉」（アーガマ、シャブダ）をあげることが多いが、実は、これも共有スポーツ世界への信頼から出て来た態度である。現代のインド思想研究者は、この古典崇拜をさして、インド思想の保守性・閉鎖性を言うことが多いが、それは些かズレた解釈である。例えば、パンディットの間でヴェーダが正当な知識根拠とされたのは、彼等にとってヴェーダこそが揺るぎのない最も確かな共有世界であったからだ。ヴェーダは大昔から存在し、インドのどの地の学者の間でも同一のものであり、世の天変地異によって壊れも減りもしない。人の生死、学派の盛衰、時の変化、土地の興亡、王朝の興隆と凋落といった一切の物理的変化を被らずに存在する。ヴェーダを知っている学者を水に沈めたり、殴ったり、殺すことはできるが、ヴェーダを損なうことは全くできない。正にスポーツ的存在である。これに対して個人の妄想や空想は頼りが無い。伝統に拠らない純個人的思索が展開する世界は、概して共有性と普遍性に欠けるものであり、単なる独りだけの白昼夢になりやすい。その思索世界を他人に語ったとしても、それを聞いた人々が彼の妄想世界を共有できるようになるかどうかは定かではない。まず不可能だ。伝統とは先輩達が保って来た共有の世界である。その世界の存在を使わずに創りあげたものは、本人だけが持つ純個人的世界とならざるをえない。こんな頼りない思考世界は、彼以外の学者達が議論をする際の確かな土台、対象になり得ないだろう。これに対して、ヴェーダは、パンディット達にとって時空を超えた共有のものである。その言葉の意味は不明にしても、ヴェーダの言葉そのものは誰にとっても明瞭な同一性、普遍性、恒常性を持っている。これほど確かな存在が古代のインドで他に有っただろうか。否であろう。この確かさ、明瞭さの価値に気付いていたパンディット達がヴェーダを「確実な知識根拠」（プラマーナ）としたのは極めて自然なことと言える。そして、ヴェーダという共有世界を否定した学者達にしても、ヴェーダに代わる自分達だけの確かな共有世界を求めた。彼等も、仲間の全てが等しく認めるような確かなもの、スポーツ世界を欲していたのである。その結果、その学派に伝わる固有の古聖典を「確実な知識根拠」とした。彼等にとっては、それが最も確かなものだったからである。これは、自分達が持つ言語伝統への信頼だ。それを信ずることによって初めて彼等の思考が可能になったのであろう。

我々は他人の心や頭の中を見ることはできない。他人の心や精神の動きは、その人の言葉や外見から推測し空想するしかない。その推測や空想が当たっているかどうかの判断すら、自分の考えで行わざるを得ないのである。人が自分の思っていること、感じて

いることを私に如何に詳しく丁寧に説明してくれても、そして私が強大な空想力を働かせた結果その人の心を「確かに理解した」と思ったとしても、それは全て私の精神の中の空想・推理に他ならない。まるで、人は、それぞれが生涯出られない個人的蛸壺穴の中にいて、その穴の底から外に向かって声や音を出しているようなものである。穴の底から空は見えるが、外には出られないので他の穴の内部は分からないし、他の穴が本当に存在するかどうかも確かではない。出来ることと言えば、穴の外から聞こえて来る様々な音から空想を繰り広げることだけである。それによって、他にも穴が有るらしいことが何とか推測できる。この孤独で寂しい蛸壺穴生活だが、外から聞こえて来る声や音からすると、穴の口から見える天空に輝く星々は誰の穴から見ても同じものらしい。穴の中の住人にとって天上の星は手の届かない別世界のものであり、穴の中で何をしても星に何の影響を与えることもできない。しかし、自分が見ているのと「同じ星々」を見ている者が他にもいる。そして、その同じ星々について語ることが出来る。話しをすることにより、空に様々な星座が見えるようになり、その物語も出来る。穴の住人は互いを直接に見ることが出来なくても、様々な星座が繰り広げる天上の様子、星座を使った物語は、誰もが見知っている共有世界となる。たとえ、それが穴の中の現実世界とは別領域の手の届かない世界であっても、その別世界の星々によって他の穴の住人と語り合うことができる。蛸壺人にとっての空の星、これがスポーツである。それを古今東西の人々が「恒常普遍の実体」と絶対視したのも無理ないだろう。

【シャブダブラフマン】

「スポーツ的存在は音声などの物理的手段によって顕現する」と言ったが、顕現しない時はどうなっているのだろうか。一体、音素<う>や単語<うし>は、人が現実に関係を使わない時はどうなっているのか。この問題に対して、インドの言語学者達は、「それは顕現してないが常に不変の状態で存在している」と答えた。確かに、スポーツとか顕現という概念を使う限り、そのように答えるしかなかろう。そして、彼等はサンスクリット語の時空を超越した永遠性、不変性、恒常性を確信した。彼等の知る限りの昔から、つまりヴェーダ以来この聖なる言葉の世界は変わらないのだから、そう信じるのも当然だ。森羅万象について考えることも、知識を得ることも、およそ事物に関する思考は何でも、その世界の内で行われる。このようなサンスクリット語に対する諸々の思いから、「宇宙の本質は言語である」というシャブダブラフマンの発想に至るのは極めて自然な経過である。彼等にとって、言葉は、それが顕れていようが無かろうが、とにかく存在している。

しかし、この彼等の考えに我々の多くは納得しないだろう。我々は古人が持っていなかった知識を持っているからだ。そこで次のようなことを考えだす。「人類が誕生する遙か以前、或は、遠い未来に人間と人間が作った物全てが消えてしまった後には、言語など

のスポーツ的存在の有無どうなってるのか？」と。確かに、現代の我々からすれば、人類が全く存在しなかった時に日本語世界が存在していたとは考えにくいし、人類の痕跡が一切消滅した後日本語が存在し続けているとも言い難い。ならば、同じスポーツ的存在である「直線」や「2という数」はどうか？ そうしたものから構成されている「ピュタゴラスの定理」はどうか？ 物理学の諸法則はどうか？ 人間の発生以前と消滅後には我々が今持っている諸言語は存在しないと言うなら、その言語の組み合わせに他ならない「幾何学的円」や「万有引力の法則」も存在しないのではないか。人の言語が存在しない時は、その組み合わせも有り得ない筈だ。確かに、その通りだろう。しかし、人類が存在しない時、宇宙のどこかで或る知的生命が彼等の言葉による彼等独自の「ピュタゴラスの定理」「重力方程式」を持つことが有り得る。たとえ、それが人間の持っているものと如何に違っていようが。それは、その知的生命に共有のスポーツ世界である。彼等にしても、宇宙を語り合い理解するには自らの言語世界を通してやる以外に道はない。これは、宇宙に存在することになる如何なる知的生命体の場合にも言えるだろう。宇宙の何処かに何らかの知的活動、精神活動が現れる時には、そこに必ず固有の言語世界が展開するのである。宇宙には無数の種類の言語があらわる可能性があるのだ。これは、まるで宇宙全体に未だ顕在化しない言語の種子が充滿しているようなものである。顕現する可能性を持つ無数のスポーツに満ちた宇宙。現代風に言うなら、潜在的情報の海としての宇宙。その意味では、かのシャブダブラフマンの発想は結構あたっているのである。

かの蛸壺穴人達が居ても居なくても、天空に星星は存在する。彼等は適当な星どうしを結び付けて考え、そこに星座を見出し、その星座を使い物語を作り出すことによって共有の世界を持ったが、このようなことは彼等以外の知的存在でも出来るに違いない。その知的存在が同じ天空を見つめる限り、同じ様なことをやるだろう。但し、彼等は、蛸壺穴人達とは違う星座と別の物語世界を持つだろうが。そして、そのような知的存在が他にも現れる可能性は幾らでもある。彼等は、それぞれ、独自の星物語を持つに至るだろう。天上の星星は潜在的星座と潜在的物語に満ちている。

(近畿大学文芸学部助教授)